



## 対人支援点描 (12)

「経験を得ることと経験を積むこと」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

「ものごとに精通すると、感性が衰え、活力が衰えるものである。それゆえ、芸術家も思索者も、ありふれたものの誕生と、知られているものの発見に没頭する。彼らはともに、ものごとの初期段階をもう一度捉えなおすことによって、生命を保持しているのである。」  
(エリック ホッファー 『魂の錬金術』 作品社より)

はじめに.

筆者も見習ないというべきか、半分スタッフのようになり、毎年参加している体験型の研修会がある。そこでは泊りがけの合宿形式で研修を行っている。参加者もさまざま、必ずしも対人援助職の人ばかりではなく企業に勤めている方もいればボランティアに携わる人もいる。また研修参加も20年以上のキャリアの持ち主もいれば、所属先の勧めで研修会に参加することになり、そこで何をするのか予備知識もなく参加したという人もいてさまざまである。

毎年、そういった参加者の顔ぶれの違いが変化を生み出し、自分を振り返りつつ、刺激を受けている。

今回、アメリカの哲学者であるエリックホッファーの書籍を読んでいて、冒頭の一文を目にし、ある年の研修会の出来事を思い出し、振り返ることにした。

### 1. 「今、ここに」という理念

筆者が「今、ここに」という言葉と最初に出会ったのは、筆者が思い立って電話相談員になろうとして民間の電話相談機関のボランティア養成に参加したときのことだった。電話相談ボランティアでは、その時かぎりの1回性の相談の出来事を重視するため、相談員と相談者との間の「一期一会」だとか、相談をかけがいのないものとして「今、ここに」の出来事の大切さが強調されていた。

のちに、「今、ここに」という理念が人間性心理学に関係する理念であり、カウンセリングの創始者(?)の一人であるロジャーズ,R.C.に由来するものであることを知ることになった。

今となっては、この「今、ここに」という理念は、人間性心理学の立場とは関係なく、広く対人援助職に関わる者が持つ基本的な対人援助の姿勢として共有されるも

なのであると否定されることはないだろう。

先入観や、支援者側の経験や憶測などを排して、その場、その時に起こった出来事に意識を傾けていく作業である。

## 2. 純粋な「今、ここに」というものはありうるのか？

しかし、私が参加した研修の中で、この「今、ここに」というものは、本当に確保できる意識であるのか、戸惑いと共に疑問を起こさせる出来事を経験することになった。

この出来事と、そこで起こった筆者の疑問は、けっして「今、ここに」という理念や、研修会を批判非難するものではない。むしろ、「今、ここに」という理念への“こだわり”や“深まり”を掘り下げたいという思いを持っている。

先に紹介させていただいた研修の件だが、最初に紹介したように参加者の特性はさまざまである。その回の研修会では、筆者はオブザーバーとなり参加させていただいたのだが、ある場面で、その研修会に初めて参加した方が自分の経歴やこれまでの経験を引き合いに自分の考えを述べたときに、数名の経験者からやや非難的な（否定的な？）勢いで、「今、ここで起きていることが大事で、あなたのこれまでのことは求められることではない」のだという主旨の流れになった。今では、筆者も他のところでも経験を重ねる中で、こうした研修の場以外でも起こりうる珍しい場面ではないということをおぼされている。しかし、その時に、一つの筆者の疑念と、その時の発言から一つの気づきが与えられることになった。

筆者の疑念は、私の考え違いでなければ、発言者の過去の経験やそれに基づく考えが、その場で語られたとしても、それ自体が「今、ここで」起こったことはならないのか、という思いである。

もう一つの気づきとは、その自分の過去を引き合いに出して発言された方が「自分が初めてこの場に参加した者であり、ここで何をするのかまだわかっていないが、この場にいる経験者に共有されている決まりがある感じがして、私にはそのルールがわからないので、どうしたら良いのかわからない。」という主旨の発言をしたことにある。

出来事として、初めて参加した方が自分の経験に基づいて自らの発言をしたときに「今、ここで」起こったことへの発言ではないと否定され、もう反対側では経験者たちが「「今、ここで」ということを語ることは、こういうことだ」という意識されない過去の経験に基づいたルール（常識や共通感覚みたいなものか）を持ち込み、その人の発言を抑えてしまうか、もしくはルールに沿うような修正の力を働かせてしまうのを感じたのである。

その両者に共通するものは、純粋な「今、ここに」というものは、自らの経験から自由になれないという事実である。

人は、何かしらの経験に基づき、自らの発言や振る舞いを行う。それを抜きにして、まるで初めて見聞きする言語、言葉を扱うように「今、ここに」という発言はできない。その場で話された会話への応答であったとしても、意識的な制限として“その場に限ったトピック”に切り取って発言しているのに過ぎない。それ以外のものは、言葉として語られない経験として暗黙の状態に置かれることになる。

研修の場で起こったことは、複数の経験者に、その言葉として語られない共通する経験がメタルールになり、その経験を持ち込んで初めて参加した方の発言に抗する現象になったのではないだろうか。

「今、ここに」を大切にする(尊重する)ことが、「今、ここに」を大切にするメタルールによって否定された出来事であったといえる。

観察者の立場からいえば、初めて参加した方の発言こそが「今、ここに」起きていることであり、意図せずメタルールを形成してコントロールが働いた発言の方が「今、ここに」の理念に反しているように感じた。両者の違いといえ、経験を思ったまま発言したことと、経験のゆえに経験上、ルールにそぐわないと発言を遮っただけの違いである。どちらも、経験に基づく発言であることには違いはない。“明”か、“暗”の違いくらいであるといえる。筆者の感じた印象が正しければ、何という矛盾だろうかと思う。

また、得てして、このような場で、このような現象が疑念のないまま受け入れられていくことがあるのはなぜだろうか、考えさせられる。

多くの場合、キャリアを積み、経験を積む人の立場にある人は、経験者という権威を持つことがあるからではないかと思う。つまり、“知らない私”と“知っているあなた”との関係で、初心者、初学者、時には患者や生徒という立場は、そもそも自らの立場の正しさや正当性は尊重されづらい位置にある。このことは、今、話題としている「今、ここに」という理念そのものと直接に関係ないテーマであるが、「今、ここに」という理念を成立する前提となる互いを尊重するような対等性を阻む要素になる

のではない。

### 3. おわりに

#### ～経験を得て、経験を積むこと。

対人援助に携わる者として、自らの経験を積み、経験を磨き、経験を活かすことが求められることは避けられない。そうしないと、私たちの取り組みが行き詰まるからである。もしくは、本人が行き詰まらなくても、周りが行き詰まる。そのために、学び、訓練するような研修が続けられる。

もちろん、その研修は、ただ義務として受けるばかりではなく、どこかしら私たちにとっての楽しみとして参加するものとなったりする。

この意味で、私たちはそれぞれの過去の経験は尊重されるべきものであるし、経験があること自体、否定もできないものでもある。

そのような中で、「今、ここに」という理念は、私たちが得た経験を問い直すものであるといえる。

時には、「今、ここに」という理念を大切にすることとは、こういうものだ。」という経験となって、「今、ここに」という理念と矛盾を起こし、対立する。「今、ここに」という理念には、その過去の経験を絶対化したり、日々起こる出来事は過去の繰り返しではないという強い思いがあったこともあるだろう。

だが、現実には、経験を積みれば積むほど、私たちは経験に束縛もされ、新鮮で新しい経験を積むことが難しくなる。私たちの脳は、認知機能障害や記憶障害が生じなければ、毎日起こることを毎日、それが全く新しい体験として受け止め感動するように

はできていないからである。

それでもなお、「今、ここに」という理念にこだわり続けるのは、どういう意味があるのだろうか。

この問いかけの答えの一つが、冒頭のホッファーの言葉にあるように思う。

もちろん、これはすべてにそうであるということではなくて、少なくとも「今、ここに」という理念を大切にす研修に参加し、筆者にとっての経験を積むことの意味であるといえる。

言葉のレトリックとして、「初心に帰る」という表現に言い換えることができるかもしれない。

「今、ここに」という理念を見つめることで、自分自身の対人援助の感性が硬直化しないように、枯渇しないようにしているといえる。

\*ここで引用した研修参加者の発言は、論旨のためにいくつかの出来事で発言されたものを再構成して発言の主旨を伝えるために筆者が別の言葉に置き換えたものです。